

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 28 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520327

研究課題名（和文） トリスタン物語における海事用語の研究

研究課題名（英文） A Study of the Maritime Terms in the Roman of Tristan

研究代表者

三木賀雄（MIKI YOSHIO）

神戸大学・国際コミュニケーションセンター・教授

研究者番号：00209735

研究成果の概要（和文）：

12 世紀から 13 世紀にかけて創作された複数の『トリスタン物語』は、海と人間の宿命的なかかわりをモチーフとした最初の作品群である。この研究では、それぞれの作品に記述されている海事表現、とりわけ船舶と航海に関わる表現に考察を加え、それらが登場人物の内的現実にとどのように関与しているかを明らかにした。また異なる地域や時代に生み出された作品相互の海事表現を比較検討することによって、中世の人々の海に対する意識の変遷を跡づけ、それぞれの作品に及ぼした影響について考察を加えている。

研究成果の概要（英文）：

The first literary works that used the fatal relation of the sea and the man as a motif were variations of the “The Roman of Tristan” story created between the 12th and the 13th century. The current research investigated expressions related to maritime-affairs in all of the mentioned pieces with special attention to terms related to vessels and voyage. The research managed to show that these expressions play an important role in expressing the inner reality of the main character. Additionally, a comparative analysis was carried out by contrasting these expressions with ones from works of the similar like but of different historical times and geographical places. The comparison clearly demonstrates the process of change in the beliefs of medieval men about the sea, and their realization in literary works.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：仏文学・中世・海事

1. 研究開始当初の背景

12世紀のフランス詩人たちが、古いケルトの伝説に想を得て、古フランス語アングロ・ノルマン方言で書きのこした一連のトリスタン物語は、海と人間との宿命的なかわりをモチーフにすえた最初の作品のひとつであろう。彼らの残した韻文詩篇は、のちにさまざまな形式の作品に書きなおされ、外国語への翻案に、散文作品に、部分的な挿話を主題にした短編や短詩に、そして楽劇のシナリオにと、多種多様な作品に生まれかわるが、その多くが海のモチーフを伝えることを忘れていない。実際、死に至る愛という作品の主題を描くために、物語の語り手たちは随所で海を利用してきた。

しかしながら、広く知られるように、中世のヨーロッパ社会において、海や浜辺は必ずしも推奨される暮らしの場ではなかった。むしろ海や浜辺は危険と悲慘に満ちた周縁的空間であり、そこに暮らす人々は根強い侮蔑と嫌悪の対象とされてきたのである。とりわけ騎士階級においては海を宗教的禁忌の空間ととらえ、溺死を恥辱と考える傾向が強かったと言われる。しかし、このような、海に向けられた人々の根強い不信の念にもかかわらず、海を物語構造の要諦にすえた『トリスタン物語』は広く理解され、受容され、ついには中世における代表的な文学作品の一つとしての評価を得るに至った。はたしてどのような理由から、この物語がみせる海洋的な性格と、中世人が抱いた海への悪感情は折り合うことができたのだろうか。流浪と苦難、さらには死を賭して実行される主人公の航海に、人々はどのような感懐を抱いたのであるか。この命題に答えるためには、現存する数種の『トリスタン物語』にみられる海事表現を詳細に検討する必要があるのではないだろうか。またこのことによって作品自体の理解が深まるとともに、それぞれの作品の背景をなしていた海洋に対する時代精神の変化についてもより明らかにできるのではないだろうか。というのも、そこには船舶や航海に関する特殊な海事社会の実態が存在していたとみられるからである。しかしながら、フランスにおける中世海事史研究は近年ようやく隆盛の兆しを見せはじめたとは言え、ことアングロ・ノルマン領域の船舶については、残念ながらまだ十分に研究・解明がなされているとはいえない。激しい潮流と海進による大量の砂泥が、たえず海底の破船を呑み込んで、海底の奥底深くに覆い隠してきたこの海域においては、水中考古学の成果に大きな期待をかけることができないからである。その上、この研究領域に関しては文献資料も乏しく、年代記や文学作品に見ら

れるわずかな記述を除いては、船舶、艀装、操船技術についての確実な情報を伝えるものはほぼ皆無に等しい。図像的資料についても、ノルマン・コンケストを題材とするバイユーのタピスリーは第一級の資料としても、その他は宗教的逸話を主題とする教会のステンド・グラスや彫刻などに求める以外に、ほとんど解明の手立てが見当たらないというのが実情である。このような現状にあって、その主題において海と深いかかわりを示す『トリスタン物語』は、海と作品内容のかかわりを探求する上においても、また広く中世海事事情の一端を探る上においても、好個の研究対象として取り上げる価値があるのではないかと判断した。

2. 研究の目的

今次申請の研究では、種々の『トリスタン物語』に記述された海事表現を正確に読み解き、それぞれの作品が見せる海洋的性格を分析し、『トリスタン物語』そのものの解釈に新しい切り口を与えるとともに、作品成立時の海洋にかかわる時代精神の一端を解明することを基本的な目的としている。というのも、もともと一連の『トリスタン物語』には、明らかに中世の人々の関心を浜辺に引き寄せ、彼らのまなざしを水平線の彼方へ誘おうとする創作意図が随所に認められるからである。そこで、『トリスタン物語』の成功を中世ヨーロッパにおける海洋への覚醒の証しとして位置づけ、主人公トリスタンを新たな海洋的人間像の創造という側面からとらえ直すことによって、中世の人々の多くが抱いていた海の暮らしに対する根強い不信の感情が、どのように変化し、どのような過程を経て克服されていったのかを解明していきたい。より具体的に言うならば、12世紀から13世紀のヨーロッパにおいて創作された複数の『トリスタン物語』をとりあげ、作品中に見られる海事表現を相互に比較検討することによって、中世ヨーロッパの人々の海に対する意識の変遷を跡づけ、人間と海との関わりの普遍的な原点を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

一連の『トリスタン物語』は五港連合やハンザ同盟などに代表される遠距離交易活動の揺籃期に創作されている。残念ながらそれぞれの作品の創作時期は明確に特定できないものの、12世紀後半に古フランス語アングロ・ノルマン方言領域で書かれた作品群から、同時期の古ノルド語や13世紀初頭の古ドイツ語による翻訳作品を経て、それよりもやや遅れる古フランス語による散文作品に至る

まで、作品をとりまく時代精神や海事的状況に変化が生じていたことは容易に想像できる。たとえば、交易活動が隆盛期を迎えるプランタジネット王朝下のアングロ・ノルマン語領域の詩人たちは、ドーヴァー海峡で活躍する五港同盟の船舶をイメージして彼らの作品の船を描いたであろうし、13世紀のドイツ詩人は初期ハンザ商人の船を思い描いていたことであろう。また北欧のサガ詩人たちは先祖伝来のヴァイキング船を念頭において描いていることが分かる。周知のように、中世の物語作者には時代考証への配慮という思考が欠落していたと言われるが、『トリスタン物語』の作者たちもまた、この宿弊をまぬがれてはいなかったからである。言うならば「無作為のアナクロニズム」とも呼ぶべき性癖が幸いして、作者それぞれが属した時代と地域における操船技法、艀装法、船舶特性、そして何よりも航海とそれを支える理念をうかがい知ることができる。それらは時として、物語の作者の創作姿勢にも強い影響を与えているのではないかとさえ思わせるほどである。このような理由から、それぞれの『トリスタン物語』にみられる海事にかかわる記述部分を詳しく分析すれば、個々の作品を特徴づける海事思想とも呼ぶべき精神風土をもまた、知ることができるのである。

幸運なことに現存する『トリスタン物語』の多くがほぼ同様のあらすじをもって語られており、トリスタンと海とのかかわりについて、たとえば「モルオルトとの戦いで致命傷を負ったトリスタンをアイルランドに導く航海」とか、「マルク王の妃を探すためのトリスタンの航海」とか言うように、各作品にほぼ共通する話題が示されている。そこで本研究では、その具体的な進め方として、さまざまな『トリスタン物語』を、12世紀と13世紀の作品に分け、さらにフランス語圏とドイツ語圏の作品に分けて、それぞれのテキストに現れる海と船にかかわる記述を比較・検討し、それら相互の異同から読み取れる海事上の時代精神の変化を明らかにした。したがって、分析と検討をおこなった対象項目とその順序は、まず物語の背景となる地域の海事情に関する全般的な調査をおこなったのち、12世紀プランタジネット朝治世下のアングロ・ノルマン方言領域で成立した数編の『トリスタン物語』と『トリスタン伴狂』、13世紀ラインラントで成立した『トリスタンとイゾルデ』、同じく13世紀の『散文トリスタン物語』のそれぞれにあらわれる船と海についてということになる。

なお、本研究の申請者は平成16年度・17年度科学研究補助金によって、12世紀の宮廷詩人ヴァースの研究を行なう機会に恵まれた(研究課題名『Waceにおける海事表現に関する基礎研究』)。ノルマンディとイングラ

ンドを結ぶ航路に近いジャージー島に生まれたヴァースは、およそ海にまつわるモチーフなどのようなものであれ、豊かな表現力と語彙力を駆使して見事に描き出して見せている。そしてそれらの記述の中には、中世の海辺に暮らした人々の心的傾向を探るための手がかりが随所に見受けられるのである。平成17年度末に終了したこの研究の成果として、船舶の種類と構造、航海技術、操船技術、艀装法、港湾、気象、海象など多岐にわたる中世海事社会の実態についての知見を得ることができた。そしてそれらは、今次申請の課題である『トリスタン物語における海事用語の研究』についての研究推進にとっての基盤的な資料となっていることを付記しておきたい。

4. 研究成果

今次の研究から得られた知見について以下の4項目を掲げておきたい。

(1) 物語に描かれた船についての考察

それぞれの『トリスタン物語』において、いったいどのような船が想定されていたのかについての検証を行った。時代も地域も異なる世界に生きた数編の『トリスタン物語』の作者たちが、彼らの海をどのようにとらえ、海の社会や船舶をどのように見ていたかを知るためには、海事史的な考察が必要になる。本研究では、数種のトリスタン物語に描かれている船舶と航海技術にかかわる記述部分について考察を加え、ヴァース研究から得られた知見を援用して、船の種類、艀装、航海特性などを明らかにしている。たとえば、『トリスタン物語』に想を得て創作された作者不詳の小作品『トリスタン伴狂』のベルン写本では、海上で風に足止めされたトリスタン一行が、櫓権を用いて力漕する記述がみられる。当時のイングランド船はスカンディナヴィアの伝統工法の影響を強く受けていた。ノルマン・コンケスト以来この海域での造船工法がヴァイキングの造船技術によって席卷されていたことは、パイユーのタペストリーに登場する船舶の図像からも明らかであろう。作品の記述から見て、トリスタンの船が撓走での航海が可能なエスネッカ型の軍船か、あるいは少数の櫓権を備えたクノール型の輸送船またはそれを祖型とするネフ型帆船である可能性が強い。しかし比較的小さな船体で、喫水も浅く、外洋での安定性も劣るエスネッカは遠洋航海に不向きなので、どちらかと言えば後者の可能性が強い。これとは別に、トマの『トリスタン物語』には、風に船足を奪われるもう一艘の別な船が登場する。物語の終章で、瀕死のトリスタンを救うためイザーをブルターニュに運ぶ船がそれである。この船は艀装から見ても、また風に対する対応から見ても、もはや撓走することが不可能な

ほどに重く大型化したネフ型帆船であることが分かる。『トリスタン伴狂』では、櫓櫂を漕いで暑さに耐えかねたトリスタンとイズーが誤って運命の媚薬を飲み、トマの『トリスタン物語』のイズーも風にとらわれた船を進めるいっさいの手立てを持たなかったゆえに、トリスタンを救うことができない。このように船の特性が物語の内容に深く関与していることが明らかに読みとれるのである。

(2) 物語の構構にかかわる海や船について

紙幅の関係ですべてを提示することはできないが、海や船が物語の内容にかかわる一例として次のような事例をあげておきたい。上記の(1)で取り上げた2隻の船は風状態に対する対応が大きく異なっている。とりわけ『トリスタン伴狂』ベルン写本では、重い航洋船を漕いで風を逃れようとする。この行動の背景には、中世の人々の航海に対する強い懸念が反映されている。風、それも穏やかな風のほかに頼るものがなかった中世初期の船にとって、風でさえ大きな不安を与えていたのである。もとより、海上ではすべてが絶え間なく変化し、流動する。彼らにとって、抜錨と解纜は、安定した日常世界、確かな生活実感との決別を意味する以外のなものでもなかった。それでも、航海が順調であれば、意識の上で陸と船上はまだ繋がりを保ち、乗客たちは陸の世界を支配する秩序の幻影に安住できたかもしれない。しかし、ごくわずかな海象の変化が、船をなじみの航路から押し流そうとするとき、乗客が抱いていた日常生活の幻影は瞬時にして消え失せ、果てしない漂流への不安が人々を苛みはじめる。しかし見方を変えれば、その瞬間はまた、人間性を歪曲するもろもろの封建的束縛からの離脱をも意味する。ベルン写本の作者は中世の船に備わった両義的性格を利用して、トリスタンとイズーをこのような特権的瞬间へ導き入れたのだ。ふたりをすべての封建的規範から解放し、個性の証しとしての愛を呼び覚ますためには、それはかくべつ好個な状況設定ではないか。

しかし、その風から、トリスタンは櫓櫂を用いて懸命に逃れようとする。それは、航路を外れ、漂流することへの危惧からなのだろうか、あるいは、忠実なマルク王の騎士として一刻でも早く帰航して、王の負託に応えようとする願望のあらわれなのだろうか。このトリスタンの行動を透かして、彼の心の奥底にひそむひとつの葛藤をうかがい知ることができるのである。

アングロ＝ノルマン方言領域の詩人ベルールの『トリスタン物語』を古ドイツ語に訳したアイルハルト・フォン・オベルクの物語によれば、トリスタンは、彼の父リヴァラン

が彼を宿したブランシュフルールを伴い、彼女の兄であるマルク王の国を秘かに脱出する船中で誕生したという。人びとは、突然の苦痛に襲われ、苦悶のうちに落命したブランシュフルールの腹部を切り裂いてトリスタンを取り上げなければならなかった。〈悲しみの子〉を意味するトリスタンの名は、この不運な出生に由来する。もちろん母の命を代償として生まれたこと自体が最大の不幸と言えるが、トリスタンの悲劇はそれだけにとどまらない。彼の誕生が正式な婚姻の結果ではなかったからである。現実はいかであれ、騎士階級の理想像がカトリック教会の意向に沿って作り変えられようとしていたこの時代において、それは社会と宗教の掟に対する罪科と言わなければならない。アイルハルトは、海上での悲劇的な生誕というモチーフを巧みに利用して、トリスタンの心の奥底に執りついた相反するふたつの情動を暗示してみせたのではないか。すなわち、既成社会への帰属を求める強烈な欲求と、海に対するぬぐいがたい思慕の感情である。前者は優れた騎士となって社会的帰属性を奪回すること。後者は母が死に、自分が生まれた海へ戻ること、つまり海と生命が織りなす女性原理への退行の夢である。のちに見事な若武者に成長したトリスタンは、見聞を広めることを口実に他国へ船出する。しかし、なぜかその行き先は、伯父のマルク王の国であった。かつて母が命を落とした船路を遡り、母の祖国に遍歴修行の場を求めようとする行動は、トリスタンの中で繰り広げられるふたつの情動の葛藤を如実にあらわしている。もちろん、父親の庇護のもとに、男性原理が支配する騎士階級に育った彼においては、社会的帰属願望が常に優位を占める。顕在化する欲望はマルク王のよき騎士となることであり、そのためには海を死の形象化された姿とみなし、航海によって克服しなければならない。無敵の騎士モルオールと雌雄を決すべく、単身海をわたって沖の小島をめざしたときも、モルオールの毒の刃に傷つき、ひとり小舟に身を託して海に命運をゆだねたときも、王の妃となるべき女性を求めて当てもない航海に出かけたときも、そのあげく嵐に流され最も危険な敵国アイルランドへ漂着したときも、その動機はすべてマルク王への忠節に根ざすものであったが、死、すなわち海の克服による生の獲得という行動規範が変わることは一度としてなかった。

『トリスタン伴狂』ベルン版において、風に足止めされたトリスタンが、力漕して難を逃れようとする理由も、そのような情動に突き動かされた結果にほかならない。しかし、それは理想化された騎士の鑄型にみずから鑄込もうとする情動であり、自己の真の欲望に目覚めないという意味からすれば、仮性

の情動と言わねばならない。媚薬はまさにトリスタンの内奥に巣食う仮性の情動の幻影を一举に破壊する。愛欲の解放を梃子に、トリスタンをすべての封建的抑圧から解放し、真正な自己を求める探求へ、自由な自己実現へと導くのである。

以上のように海と船は、物語の結構に深く関与する形で用いられているのである。

(3) 新しい騎士像としてのトリスタン

いずれの物語においても、マルク王の騎士としてのトリスタンは理想的な人物像として描かれる。とりわけ海とのかかわりにおいて、トリスタンは新しい騎士像、— 言わば海洋的ともいえる騎士像のモデルとなっている。たとえばトリスタンは、騎士には許されないはずの海上での死を望むばかりか、キリスト教が蔑視していた商船に便乗することも、海の交易商人をよそおうことさえ辞さない。どのような国の、どのような港へでも船を乗りつけ、商人になりすまし、土地の言葉をあやつっては抜け目なく目的を達成する。このようなトリスタンの行動からは、硬直した封建騎士の姿は見えてこない。運命によっていずこの土地の流れ着こうとも、どのような境遇に陥ろうとも、直面する状況に抜け目なく対応し、巧みに順応しながら、自己実現を試みる。それは、瞬時のうちに自らの運命が急変する危険な海に生きた中世の海の民に共通の心性であった。そしてそれはまた、十字軍をはじめとする遠隔地への軍事遠征を求められた騎士たちに必要となった新たな能力でもあった。

(4) 物語の背景をなす時代精神 — 海事思想の変化

『トリスタン物語』のいずれにおいても海洋交易に対する肯定的な姿勢が示されている。特に騎士道物語本系に属するトマの『トリスタン物語』には海を繁栄と飛躍のかなめとするプランタジネット朝支配下の時代精神が、またドイツ語への翻訳作品であるゴットフリート・フォン・オベルクの作品には、遠隔地との交易活動に乗り出そうとする初期ハンザ商人時代の気運が色濃く反映されている。確実に安全な航海を求める時代に生きたゴットフリートは、彼以前の物語にみられた航海の不確実性をいっさい否定し、そのために物語のあらすじにまで変更を加えている。さらに時代が下った『散文トリスタン物語』には、船を日常的な移動の手段として頻繁に用いていた現実が描き出されている。これらの物語においては、海を神の掟の支配する裁きの場ととらえ、技術的な意味においても、また精神的な意味においても、トリスタンを海に向かわせ、その克服によって自己実現に導こうとする創作姿勢が見られるの

である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① 三木賀雄、『散文トリスタン物語』における海事表現について、神戸大学国際コミュニケーションセンター論集、査読無、No. 7、2010、pp. 15-24

② 三木賀雄、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタンとイゾルデ』における航海について、神戸大学国際コミュニケーションセンター論集、査読無、No. 6、2009、pp. 21-33

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三木賀雄 (MIKI YOSHIO)

神戸大学・国際コミュニケーションセンター・教授

研究者番号：00209735

